残酷な彼女と服従の彼

りょたかー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
残酷な彼女と服従の彼

【Ｎコード】
Ｎ７３０５Ｓ

【作者名】
りょたかー

【あらすじ】
俺、北南　宋二＜きたみなみ　そうじ＞はごく一般的な高校生。
もちろん、チートな能力も、勇者の紋章やら、必殺技などある訳がない。
ごく一般的に暮らせたら満足なのだ。

しかし、ある日、非凡な事が起きてしまった！
ドＳな美少女、迫り来る化け物。
はたして俺に安息の日は来るのか！？

※注意、ヒロインは少々…結構Ｓです。
そういうのが嫌いな方はご注意してください。
また、作者は厨二病が発症してるかも知れません。
誤字脱字もあるかもしれません。
これらの事をご了承しの上お読みください。

更新履歴
（５／１３…新話追加）

第零話　日常、崩壊

ジリリリリリ！

うるさく鳴る目覚まし時計を止めて、布団の中から顔をだす。

「はぁ眠……」

俺はベッドから出た。

背伸びを何回かする。

眠気はとれない。

あくび2～3回もした。

が、眠気はとれない。

目を擦りながら部屋から出る。寝ぼけながら階段を降りて1階へ。

途中で階段を踏み外しそうになり慌てた。

両親は居ない。家族は7年前の事故で居なくなった。たわいのない事故だった。毎日、ニュースで放送される様な事故。

トラックが俺の家族を乗せた乗用車と激突した。その時、俺は友達の家に行っていた。その事件は俺の母、父、妹を奪った。

事故を起こしたトラックの男は飲酒運転をしていた。許せなかった。後はあまり記憶にないが男は懲役何年と捕まっただけだ。死ねと思った。俺は未だに奴を許せない。許す気もなかった。

牛乳を冷蔵庫から取り出す。そして棚からコップを出し、それに牛乳を注ぐ。食パンをトースターに入れ、皿を用意する。

今、俺が生活できているのは伯父が生活金を送っているからだ。俺の伯父は金を大量に持っていた。何故なら俺の父の遺産があったからだ。多額だった。俺に入るはずの遺産はどういう経路か伯父に入っていた。どうやら俺は騙された様だ。幸い、伯父は世間の目に弱かった為、お金は一応、送って来る。しかし、父の財産の量から見れば微量だ。

その伯父と伯母はこの家には居ない。

この家は父が買った家である。

「ん？」

冷蔵庫が空になったのに気付く。どうやら牛乳しか入ってなかったようだ。

俺、北南　宋二＜きたみなみ　そうじ＞はまだ高校2年生である。

なので、毎日高校に通わなければならない。ついでに通っている学校の名前は公立西江高等学校だ。
そして俺はこの年齢にして一人暮らしをしている。一人暮らしするにはまだ若すぎる…と友人は言う。

パンと牛乳を食べ2階に上がる。

2階で服を着替えはじめる。パジャマを脱いでいく。そして、ハンガーに掛けてある制服に着替える。制服は上はカッターシャツに紺色のブレザー。下はチェックのズボンだ。
丁度、制服が着替え終わった時の事である。

突然、俺の足元に変な光りの輪が生まれた。それはイメージで言う幻想的な魔法陣の様だった。光る輪の中にもう一つ輪がある。そして文字が配置されている。

「…？」

寝ぼけていたのか俺はあまり興味を示さない。

これが俺の人生を変えた事件の始まりだった。

キイイイィィィィィン！

突然、高音がして地面から何かが生えて来る。あまりの高音に耳を塞いだ。

「な、何だ！？」

黒い、しかし少し紫色をした巨大な玉が地面から現れた。完全な球体。不気味な色。見た目から危険が感じられる。

「……うわっ！」

ようやく俺が事を理解し（大半が理解できてないが）後ろに逃げた。部屋の壁にもたれ掛かる。背中に固い感触がある。

少しずつ上がってきて空中で静止した。球体は少しだけ回転している。まるで、上だけ吊したボールを少し回した様に緩やかに回る。

「……何…これ？」

俺は球体に恐る恐る触ってみた。

バキッ！
黒い玉はひび割れた。一瞬、自分が壊したのか、と思ったが違う様だ。亀裂が全体に走る。
「え！？えぇ！？」
異音がして黒い球体の殻が割れていく。それと共に紫色の煙りが発生し、部屋の視界が悪くなっていく。
「げほっ、げほっ」
煙たかった為、咳込んだ。ガラッ、ガラッと何かが地面に落ちていく。恐らく黒い玉の殻が外れたのだろう。

「クククッ」
不気味な笑い声が部屋を侵す。
「ククク……遂に来た…ここが地上！人間界か！」
辺りの煙りが消えていく。部屋の中心に小柄な人が立っている様だ。俺はそれをただ呆然と見つめた。
「ハハハハハ！まずは人間を見つけるか！愚図な人間が良いな！私に従って命令に忠実な犬が良い！クククッ！」
煙りが晴れてそこに立っている人を見た。
黒いゴシックドレスに身を包んだ炎の様に赤い髪のロングヘアー

の美しい少女だった。
年齢は俺より下かもしれない。と、関係の無いことが頭に浮かんでは消える。

「え？」

俺は理解できなかった。
いきなり部屋に…不気味な美少女が現れたのだ。しかも電波気味の。
少女はゆっくりと周りを見渡し、こちらを見たとき顔を止めた。動作一つ一つが美しかった。

「ククッ、居たな！」
こちらに近づいてきた。足並みはとても速かった。後ろは壁だこれ以上は逃げられない。

「おい、貴様……私の下僕になれ…そうしたら命は助けてやる。否定すれば…」
そういって少女が自分の首元を切る様な仕草をする。

「あ、え？」
理解できない。

初対面の人間（？）にいきなり下僕になれと言われた。

「ふっ…ふざけんな！何だよ！お前！」
気が動転している。自覚が出来るほどに。
「…お前、だと？……口の聞き方がなっとらんな…」
こっちを指差した。
『縛れ（ロープ）』
少女が言葉を発した瞬間、俺の体が動かなくなった。まるで体が石になったようだ。
「かっ……」
言葉を発することも出来ない。息が苦しくなる。
「私が教育してやろう」
薄い笑いを浮かべながら迫り来る少女、体が満足に動かせない俺、絶体絶命のピンチである。無理矢理、動かそうとするが体がいうことを聞かない。それどころが激痛が生まれる。
「ぐぅうう」
うめき声をあげるしかない。
「クククッ」
それを見て少女が嘲笑した。
「貴様…動けないと知りながら動こうとするとは…馬鹿だな！馬鹿は死なねば治らないらしいな！一辺死ぬか！？クククククッ！！」
少女に頭を蹴られた。体を動かせないため、為されるがままに後ろに倒れ込んだ。

「謝れ！ひざまずけ！そして私の足を卑しく舐めろ！ゴミ虫！いや虫以下の下等生物が！」

何度も蹴られる。かなり強力な蹴りに体がメキッメキッと悲鳴を上げる。少女は俺の頭を掴み自分の方へ向かせた。

「謝れよ…今すぐにな」

仕方がない謝ろう。このままだと体が持たない。例え自分が悪くないとしても謝らなけらばならない。

「す……すみま…せん」

屈辱的だ。

しかし少女は頭を離さない。どうやらお気に召さなかったらしい。

「…何だその謝り方は？こう言え『私のようなゴミが貴女様に逆らってすみません。』とな！」

少女は手を離した。俺の頭は地面に落ちた。ゴンッと鈍い音がした。

痛い。

「わ…私のような……ゴミが貴女様に…逆らってすみません…」

屈辱と恥辱。その両方が胸に生まれ、心を遣るせなさが満たす。

「クッハハハハハ！」

少女は上機嫌に笑った。さも、面白いモノを見てるかのように。

「上出来だ…やれば出来るじゃないか……ククッ」
少女はにやけている。
『解け(リ・ロープ)』
体が動くようになった。
「ククッ…貴様下僕の才能があるな……」
少女にとって誉め言葉の様だが全然、嬉しくない。
「どうだ…私の下僕にならないか？今なら優遇して蹴らないでやろうか？」
嫌だ。

だけど、このままだと痛い目を見る事になるだろう。下手すれば死ぬかもしれない。それだけは嫌だ。しかし、人間の尊重など、この少女にはなさそうだ。人間としての人生が死ぬかもしれない。
悶々としている。
しかし死ぬのは嫌だ。
悩む。
下手をすれば人として人生を送れなくなりそうだ。慎重に決めねばなるまい。

「わ…わかりました」
俺の人生最悪の決断だった。
やはり死にたくはない。人間、そういう物だろう？
「ククククッハッハハハハハハ」
少女は機嫌よく笑う。その笑い声は俺にとって不気味な騒音でしか無かった。

この出来事は俺にとっての地獄の始まりだった。

第一話　悪魔、降臨（上）

「我が名はクシャ・ルルフ。
魔界の監獄、地獄に勤める死神だ」
赤髪の少女は言った。

「…え？」

せんせー意味が分かりませーん。
なんの話ですか？なんの？

「フン、そういえば一々説明せねばならんのか。面倒臭いな。」
少女、もといルルフは面倒臭そうに後ろ髪をすいた。

「魔界というのは…そうだな。貴様ら人間が住む、人間界とは違う世界の事だ。魔物や、悪魔が居る世界だ。他にも……」
説明は結構、長かった。

まず、魔界。
　悪魔と魔物が存在する世界。悪魔も魔物も知能が有り、人と何ら変わりないらしい。ついでに魔界を統べる王が魔王。神は魔神、らしい。
次に、地獄。　魔界にある『罪深き人間の魂』通称【悪魂（アクダマ）】を管理する場所。働かせて罪を償わせて、『綺麗な魂』【善魂（ゼンダマ）】にして、記憶を消し、転生させるらしい。

そして、死神。
地獄で働く悪魔達。主な仕事は人間界の悪魂(アクダマ)を集める事が仕事らしい。時に、悪魂(アクダマ)は人間の、恨み、憎しみ、嫉妬、欲望を吸収して、人を食らう化け物、【魔鬼那(マキナ)】になるらしい。
それを退治して人間界への影響を無くすのも仕事らしい。

「……て事だ。わかったか愚図」
ルルフがこっちを睨んだ。
「分かりましたが……ルルフさん。私は愚図じゃありません」
ガスッ――――――――
蹴られた。
「お前は愚図で充分だ！それに！私の事はルル様と呼べ！今度間違ったら殴るぞ！」
――もうすでに蹴ってますよね…
と、言ったら殴られそうなので言わない。
「それでだ！貴様にはこの悪魂(アクダマ)狩りを手伝わせる！いや、一般の悪

魔なら誰でも出来る！貴様なら無理かも知れんが…やり方さえ覚えれば猿でも出来る！」

という事で悪魂狩りに行かされました。一応、服を着替えてから家を出ました。着替えてる途中、完全にルルフが……俺のナニを見ていたが、もう過ぎた事だ。あまり深く考えないようにしよう。

というか学校を無断欠席してしまった……大丈夫だろうか？

「では、まず教えよう！しっかり聞けよ！愚図！！モタモタしてると殺すぞ！」

ルルフが遠くにある廃墟を指差した。

「悪魂はああいう陰気臭い所によく居る！しっかり覚えろよ！愚図！！」

成る程……確かに何か出そうだ。というか、もう、愚図は決定ですか？

「今からあそこに行く！ついて来い！」

渋々、俺はついていった。

街で何人かの人とすれ違う。しかし、誰もこちらを見ない。いや、視線に入るような事はあるが、誰も気にしない。

こんな昼間に、学校へ行っているハズの若者と黒い豪華なドレスを着た赤い髪の女が居てもだ。明らかに不自然過ぎる。

「……」
不思議な現象に悩んだ顔をした。
「どうした？愚図。いつも以上に呆けた顔して…」
ルルフが心配する様な顔を見せた。しかし、よく考えてみると「いつも以上」という事はいつも呆けた顔をしている事になる。
やはり失礼だ。

「いえ、誰も気づかないのは何でかな、と考えていて…」
「ああ、それか」
さも当たり前の様に納得するルルフ。ここで俺は気づいた。コイツがやったんだと。
「これは魔術だ」
ん？魔術？
「…そういえば説明してなかったな……魔術というのは悪魔の秘術だ。最初に使った金縛りもそうだ」
頭に出会ったときの事を思い出す。
「呪文を詠唱し生み出す技だ…これ以上は秘密だがな」
結局、他には何も離さず、魔術についての説明はそれだけだった。

「着いたぞ」
ルルフが指を指す。
目前には壊れた廃屋が見えた。見た目が恐怖を誘う。壊れた窓、無くなった扉、煤けた看板からは昔の繁栄のカケラもない。
見えにくかったが、看板には「黒木デパート」と書いてあった。
「さぁ…入るぞ」
ルルフが俺の手を掴んだ。柔らかく、温かかった。一瞬チラッと変な感情が生まれた。
が、現実は甘くはない。
「ちょっ、え？」

「はッ！」
一度腰を落とし、足を曲げ、一気に伸ばす、見た目のヤワですらりとした足からは考えられないほど飛んだ。
「ぎゃあああああぁぁぁぁ」
俺の悲鳴が響く。まあ、誰にも聞こえないのが唯一の幸だ。
一度のジャンプで3階はある大きな建物である廃屋の屋上に飛んだ。
「何だ？ビビったか愚図」
ルルフが振り向き嘲笑う。
もう俺、愚図でいいや。愚図でいいから帰らせて。
「む……近いな」
ルルフが屋上のドアを蹴破り中に入っていく。遠慮など無いのだろうか。
あ、ヤベ…ついていかなきゃ逆にヤバくね？魔鬼那（マキナ）って人食うんだよね？
気づいたときには既にルルフの姿は無かった。血の気が引いた。顔が真っ青になっていく。
「ルル様ーー！」
俺はいつの間にか既に完全に下僕と化していた。……というか臆病者？

第一話　悪魔、降臨（上）（後書き）

次話は明後日の予定です！

第一話　悪魔、降臨（下）

「む？逸れたか」
ルルフが後ろについてきてない己の下僕の事を考えた。
「しかし…奴はノロマだな……。こんな事で悪魂(アクダマ)狩りは大丈夫なのだろうか…？始めての下僕がアレではな…。格好が付かん…」
愚図（宋二）はこの地上界へ来て初めて出会った人間だ。しかも【偶然】では無く、【必然】なのだから運命を呪うことも出来ない。いや、奴の弱さを呪うことは出来そうだ。
「ふむ、此処には居ないようだな……」

「…ルル様ーーー」
遠くで私を呼ぶ声がする。ようやく、ルル様と呼ぶようになったか。
ルルフは少し笑った。
「ククク……」
笑っている途中に頭に雑音が響く。
「む…！魔鬼(マキナ)那か？」
魔鬼(マキナ)那は稀にしか地上には居ない。だから、此処にいる悪魂(アクダマ)は通常の人魂の様な貧弱なタイプだと思ったが、そうではないらしい。結構、強力な魔鬼(マキナ)那だ。
「場所は……成る程、面白い…」　まさか……あんな場所に出るとはな。急がなくてはいけない理由ができてしまったな……

「ああ～どこに行ったんだ～」
その頃、宋二は廃屋をさ迷っていた。昼間と言えど廃屋は怖かっ

た。
「ふぅ、ちょい休憩…」
宋二は道の柱に座った。
「……グケッ」
不気味な短い笑い声が聞こえた。ルルフとは違う、異質。意思が感じられない、感情のない笑い方だ。
辺りに用心する。
この場合……恐らくは魔鬼(マキナ)那だ。宋二は魔鬼(マキナ)那が頻繁には出ない事を知らなかった。
「ググググキキキキキケケケ！！」
凶悪な笑い声が響く。
「グケケキキ！……」
笑い声が止まった。
息を飲む。
突然、後ろから何かが迫ってきた。ソレは黒く大きなトカゲの尻尾の様だった。
「危なッ！」
かろうじて避ける。そして……振り返る。
宋二が目にした光景は奇妙な物だった。
巨大な黒い胴体、赤く光る一つ目、それ以外に何も無い顔。そして胴から生えた８本の触手。
化け物――――――

それ以外に考えつく言葉は無い。

どうするか？

いきなり逃げるか、一撃を食らわせて怯ませて逃げるか。前者の方が確実か……

考えてる間にも魔鬼那（マキナ）は触手を使い攻撃をしかけて来る。幸いなことに相手の動きは鈍く用心すれば一般人である宋二にも避けられる物だった。

しかし、その一撃は強力で触手は酸を纏っているのか、触れたモノを容赦無く溶かしていく。あの攻撃を喰らえば怪我では済まないだろう。

「グガッ！ギッ！ギッ！ギッ！」　魔鬼那（マキナ）は触手を巧に使い宋二を壁の際に追い詰めていく。何本もの触手が宋二の体を擦（かす）る。

「うわ！お！わっ！」

避け続ける宋二に時間と共に追い詰めていく魔鬼那（マキナ）。長期戦に持ち込まれたら不利である。

『あー！もう！なンでアたンナいノ！』

「え？」

突如聞こえた若い女の声に宋二は反応した。しかし、此処には魔鬼那（マキナ）しか居ない。

まさか……

『ハヤく死んデよ！タベさせテヨ！』

コイツか！？
目の前の魔鬼那（マキナ）を見る。そういえば、魔鬼那（マキナ）は人間の腐った魂に負の感情が重なって生まれた化け物だ。なら、知性があってもおかしくはないのか？
『シね！しネ！死！死死死！！』
まるで意味のない単語の様に繰り返す。いや、知性はないのか？
『死ッ！！！』
魔鬼那（マキナ）の一つ目からレーザーの様な物が飛び出す。赤い光の筋が光る。
「危ない！」
宋二はとっさにしゃがみ込んだ。しゃがみ込んだ宋二の頭のギリギリを閃光が通り過ぎる。
頭上のコンクリートの壁に大きな穴が空いた。
「んな！ビームも有りかよ！？」
驚いた顔をする。
「クッ違うな！ビームやレーザーの様な科学ではない！」
宋二は声の先を見る。そこには赤い髪、黒いドレスを着た少女が立っていた。
「ルル！」
ドガッ！

重い衝撃が頭に走る。何かをルルフが投げたようだ。足元に黒いハイヒールが落ちている。

「呼ぶ時はルル様と呼べ！」

「…ルル様！」

仕切直して。

「此処から先は見学タイムだ！前に出るなよ！」

ルルフが魔鬼那（マキナ）を睨みつけた。

「ふん…鑑定眼（スコープ）！」

相手を改めて見る。

種族：魔鬼那

【タイプ：死十（シト）】Ｌｖ７

「成る程な…」

鑑定眼は相手の能力を見る魔術だ。Ｌｖ１０が限界の十段階の選定だ。Ｌｖ７は結構な能力、下手すれば街を滅ぼすと言うほど力を持つ。

「ならば……」

ルルフが手を太陽に翳（かざ）す。

「召喚（サモン）！死鎌（デスサイズ）！！」

高く伸ばした手に、光の粒子が集まる。粒子が集まりカタチを作る。作られたカタチは大きな鎌。刃の前には髑髏（どくろ）が付いている。

正にそれは死神の鎌に相応しい武器だった。

「すご…」
柱に隠れて宋二が見ていた。
「死神専用の武器であるこの【死鎌(デスサイズ)】の力は……貴様の力では足元にも及ばん！」　ビルを跳んだ脚力で接近する。風を切る音が宋二にも聞こえた。

ズガガガガガガガ――――――

天井を切り裂きながら接近する。コンクリートに引っ掛かってもスピードが落ちる事は無い。

『いヤ！来ナいデぇええ！』
触手を伸ばし空中のルルフを攻撃しようとする。

「ふん…」
触手を大きな鎌で切り裂く。切られた部分が宙を舞い、真っ赤な血を撒き散らす。

「どうやら死にたい様だな！？」
ルルフは鎌を振り上げ疾風の如く接近する。

『ひィッ！』
恐怖に歪められた声が出ている。それを赤髪の少女は嘲笑う。

「二度目の死だ……よく味わうがいい！」
ルルフが死鎌(デスサイズ)を振り下ろす。空を斬る、風を斬る、そして、敵を斬る、そして止まらず大地を斬る。

『キイィィィィエェェェ！！』

真っ二つに割れた魔鬼(マキナ)那は悲鳴を上げ、鮮血が噴水のように沸き上がった。

「……グ…グロい…」

宋二の正直な感想である。

返り血を浴び、白い肌が赤く染まり、黒いドレスは赤い斑点の模様が付いた。手は血塗られ、真っ赤になっていた。

魔鬼(マキナ)那は倒れた。そして倒れた魔鬼(マキナ)那は光の粒となって消えた。

「ま…ざっと、こんな物だな」

ルルフが振り返った。

「次からは貴様にもやってもらうからな」

聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「無理ですよ……こんな事…！」「馴れれば出来るさ……返送(リ・サモン)！」

ルルフは鎌を消した。

「殺らなくては誰か…別の誰かが死ぬ事になる…」

ルルフが服で手についた血を拭いた服が赤みを増す。

「分かってる……分かってますよ…！」

宋二は拳を握り締めた。

「なら……何を迷うのだ貴様は！」

ルルフが宋二の顔にビンタした。勢いが殺しきれず宋二は倒れた。

「貴様が迷って自分が死ぬのはいい……自業自得だからな！」

ルルフが顔を上げた。

「だが！実際はそんなに甘くはない！お前が……戦士が迷えば大勢

が死ぬ！貴様の性でな！」

ルルフが宋二の腕を持ち、無理矢理、立たせた。

「しかし……貴様には救う力もある！貴様は私が見込んだ男だ！自分を信じなくてもいい！私を…！私を信じろ！」

ルルフが自分の胸を誇り高く叩いた。

「分かりましたよ！やりますよ！やるよ！俺は！」

今までの日常を振り返る。怠惰に過ごす日々、何もなく、「頑張らない」日常。刺激等、もはや夢の中での話。

それを…その常識、日常を粉々にした悪魔。黒いドレスを着た、赤い髪の悪魔。

その悪魔は……

もしかしたら……

僕が待ち望んでいた世の中の理不尽を覆す、救世主（ヒーロー）だったのかもしれない。

第一話　悪魔、降臨（下）（後書き）

これで第一話は終了です…
第二話は新キャラが出まくる予定です。

第二話　非日常、成立（上）

「元気ないね、先輩？」
ショートカットの茶髪の少女が話し掛けてきた。
「ん…まあね」
机に俯せたまま宋二は答えた。
「どうしたの？相談なら乗るよ？」
優しく少女は語りかける。ただ、今は優しさは辛いだけだ。
「優香…俺は別に大丈夫だよ…」
後輩など年下に心配されるとは…そんなに俺は不安な顔をしてるのか。それなら、心配させない為にも明るい顔しなければな。
ひきつった顔で少し笑ってみる。それは優香をより一層に不安にさせた。
「本当に…大丈夫？」
優香が悲しそうな顔をする。
優香は宋二の一つ下の学年の生徒で、いつも昼食を食う場所が一緒だ。その性もあってか仲は良い方だと思う。
「はぁ」
気づいたらため息をついていた。優香がより悲しそうな顔をた。

先日、自宅に悪魔が降臨した、と言ったらバカにされるかもしれない。が、事実だ。
悪魔の名はクシャ・ルルフ。通称ルル……いや、ルル様だ。つい

でにそいつはドSである。事あるごとに人を殴ったり、物を投げつけたりする。まるで糞を投げるゴリラの……いや何でもない。

「お前の家に住まわせろ」
「へ？」
いきなりの問題発言である。血塗られた少女は俺に「住まわせろ」と言う。

「家が無いんだ…仕方ないだろう？」
でも、女の子…しかも美人と一つ屋根の下で過ごすのは……嬉しくて、恥ずかしい。

「で……でも」
「煮え切らない奴だな！さっさと良いと言え！」
良いと言わないとダメらしい。酷い…
「…良いですよ」
俺の根性なし！
「よし、すまんな邪魔するぞ」
玄関を開け家に入られた。
「そうだ、愚図…なんか飯作れ」
「うっ…食べ物は今、家に無くてさ…」
「じゃあ、買ってこい」
ルルフが宋二を指差した。

結局、自転車で走って、大手ハンバーガーチェーン店で色々買う羽目になった。

「はぁはぁ…ただいま…」

宋二が息切れしながら帰ってきた。
「遅かったな、愚図」
「無茶言わんで下さい…これ以上、速くは…出来ない」
ハンバーガーを出そうとすると自転車のカゴに入ってなかった。
「あれ？」
振り向くと何故か机に既に置いてある。
「もう、食ってるぞ」
そういうとルルフは既に食いはじめていた。
「魔術…ですか？」
「モグモグ……もちろん」
そんな事で一々使ってるのか…無駄遣い過ぎる。
「お前は食わんのか？」
と言いつつ既にポテトMサイズとハンバーガー、ジュースを既に平らげ次のハンバーガーに手を出そうとしていた。
「食べますよ…あ、それ駄目です俺のです」
3個目のハンバーガーを指差した。

久しぶりに晩御飯を複数人で食べた。やはり、一人で食べる飯より何人もと食った方が美味い。たとえ、それがファーストフードでもだ。

「あ、風呂借りるぞ」
ルルフはテレビを見ていた。俺がつけたらハマった様でテレビの前のソファーで寝転んで見ている。
「風呂はそっちのとこだから……」
宋二は家の風呂を指差した。
「そうか」
ルルフは立ち上がって風呂場に向かった。頭にふと不安が過ぎる。
「風呂の入り方は分かるか？」

ルルフは足を止め、こちらを見た。
「馬鹿にするなよ、愚図」
どうやら心配は無さそうだ。

ルルフが風呂に入っている間、洗濯物をたたんだり、朝の食器を洗ったりした。

ガラガラ、と音がしてルルフが風呂から出たのが分かる。何だか嫌な予感がする。
「おい、愚図、変えの服はあるか？」

振り返るとルルフが立っていた。いや、立っていたのは良いんだが…問題は服を着ていない事だ。
一糸纏わぬ姿で、その滑らかな素肌を見せつけていた。すっぽんぽんとか、そういや貧乳だ、とか変なことばかり思い浮かぶ。
そして思考に体が追いついて……

ブッ――――――

と鼻血を噴き出した。

「ゴフッ…！速く服を着てください！」
なるべく見ないようにして言う。
「だから服が無いんだよ……何だ、お前、血なんか出して。」
こっちに近づく。
「まさかお前、発情してるのか……？」
その姿で言うなよ！
「……見たいなら見ていいんだぞ、ほれ」

そう言って、宋二が目を押さえ付けている手を無理矢理引っぺがした。

ブッ――――――

本日、二度目の鼻血の噴水。

ルルフはニヤニヤしている。

「ククククッ、面白いな」

裸のルルフが俺にくっついた。手に柔らかな感触が……よく見たら俺の手はルルフの胸に触っていた。

ブッ！ゴフッ！ヅッ！――――――

最早、鼻血の音ではなかった。

きづたらベッドにいた…

「気づいたか…」

ルルフが近くに立っていた。

「その…何だかスマンな…」

俺は驚愕した…ルルフが謝るとは…明日雨でも降るんじゃないか？いや、もう石が降りそうだ。

「あそこまで出血するとはな…思ってもなかってな…」

あれ？俺もしかしてやばかった？鼻血で出血死は笑えないぞ。

よく見るとルルフは俺の服を着ていた。タンスから出した、真っ

白なシャツとジーパンを着ているが…ブカブカだ。
「すまんな、今日はベッドで寝ても良いぞ…」
今日は…て事は普段は床で寝させるきか？
まぁお言葉に甘えさせてもらって。
今日は普段より疲れていたのかグッスリと眠れた。

「…ん……」
朝、時計を見ると7時を表していた。
「着替えないと…」
ベッドから出ようとする……ん？何かが肘にぶつかった。よく見ると、ルルフだった。しかも全裸。
鼻血出るか？と思ったが出なかった。昨日、出し尽くした様だ。
「…何で此処で寝てるんだ」
つついて起こしてみる。柔らかかって、また顔を真っ赤にした。
「ふぁ？どうした愚図？」
寝ぼけてても愚図か。
「どうもこうも……何で裸？何で此処で寝てんの？」
「何でって…裸は寝るときは普通だし……」
アメリカンスタイルか！？って、つっこみたくなる。
「ベッドでお前が寝ていいとしても、私は普通に此処で寝るぞ？」
あらまぁ。何て言うか……何でラブコメみたいな事やるんだ！としか思えない。
「俺、学校行きますから」
立ち上がって着替えを始める。

「がっこー？」
知らないのか。
「子供が勉強する所だよ」
「ふーん」
あまり興味は無さそうだ。
「んじゃ俺、行くから」
着替えが終わり部屋から出ようとする。
「ん…行ってこい」
メシを食って家から出る。ついでに書き置きで、昼飯の場所を書いておく。カップラーメンの作り方は知っているのだろうか。

ちょっと疑問が残ったが、家から出て学校へと向かった。今日の朝の話である。

第二話　非日常、成立（下）（前書き）

すみませんでしたm（＿＿）m

内容がかなり吹っ飛んでました。今後はこんな事の無いようにしますので、これからもよろしくお願いします。

４月３０日に修正しました。

第二話　非日常、成立（下）

優香は俺の顔を見て涙目になっている。悪いことをした、と思った。

「何やってんの、宋二……女の子泣かして…まさか別れ話！？」

黒髪のポニーテール少女が話し掛けてきた。一目見ただけで活発な人間だと分かる。容姿も良い方だ。

しかし、馬鹿だった。

宋二は無視した。

「…ごめん、優香…本当になんでもないから」

取り敢えず謝る。「なんでもない」ことは無いのだが説明できるような事ではない。

嘘をついている様で胸が痛んだ。

「…うん…というか私に謝らなくていいよ」

優香が謝った。しかし、内心では頼られる事が出来ない自分が悲しかった。

「ん？一見落着？で、結局、何の話だったの？」

騒がしく黒髪の少女が話す。まったく空気を読まない奴だ。

「何でもない、というか充（みつる）、お前には関係ないだろ」

「関係無いことないよー？…世界の人々の色恋沙汰は私のエネルギー源なんだよ？関係ない訳ないじゃん」

「はいはい、変態と馬鹿には関係ないです」

宋二は冷たくあしらった。

「…女の子を虐めるなんて…酷いよ！あんなに私で××××をした

のに！」
充が無駄に芝居じみた声を出した。
「うっ！学校でそんな単語使うな！それに俺はしてない！」
宋二は充の頭にチョップした。

充は宋二と同学年の女子だ。男らしい名前が表す様に男勝りである。
趣味は覗き、特技は下着ドロボウと早い話が変態だ。
「ねぇ宋二君、××××って何？」
理解できないようで優香が宋二に訪ねた。答えがたい。そこに充が割り込んできた。
「ゆーちゃん、××××っていうのはね？男が×××を×××…」
「やめい！」
もう一発チョップを食らわす。
「おう、何だ、宋二？女を虐める趣味でも出来たか？」
後ろに黒髪の男子が立っていた。

１００人、女子がいれば、９９人が「かっこいい」と答えるであろう男だ。

「輝（ひかる）……俺がそんなことしてるように見えるか？」

コイツの名は輝。お茶目な（ふざけた）な性格とその容姿でモテモテであるチート男である。ただし、本性はかなりのオタクで「残念なイケメン」と言われている。

「俺にはそう見える。少なくとも両手に花を持ってる…あ、片手に花か？」
「ちょっと～、ひかるー酷いよー！」
充が怒っている。

「いや、まぁそう怒るなよ。で、宋二、あの話だが……」
輝がシリアスな顔をした。
「……」
しばしの沈黙が訪れた。

「<魔法少女ルナルナ>の限定盤萌え萌えフィギア（１６９９８円）は手に入ったか？」
ズコっと音がして充がこけた。ノリが良いこと、が充の長所だ。
「いや、昨日は江西屋（えにしや）には行ってなくて」
江西屋（えにしや）とは宋二の従兄弟が経営するホビーショップで、何かと宋二にサービスしている。そして輝は宋二にお願いして魔法少女ルナルナ、限定盤萌え萌えフィギアの予約させてもらっているのだ。
ついでに魔法少女ルナルナとは最近放送し始めた現在人気のアニメである。宋二は内容をよく知らなかった。
「そうか……」
輝がとても悲しそうな顔をした。ここまで落ち込むとは……
「あの、輝君！これ…」
後ろから少女が輝に何か渡した。手紙、ハートの模様、見た目からするとラブレターと言ったところか。
「ごめん、宋二ちょっと行ってくる」
輝は少女を連れて出て行った。

「くそ…リア充、爆発しろ……」
クラスの誰かが言った。

「ただいま～」
家のドアを開けて家に入る。
「おかえり」
ルルフが奥から言った。ここらへんは律儀だよなぁ。

靴を脱ぎ奥へ入るとルルフが謎な物をこねていた。粘土？ではなく紫色で脈を打っていて…恐らくモザイクを掛けなくてはいけなさそうな物だった。

「おい…何やってんだ」
訪ねてみる。余りにも意味が解ら無さすぎて丁寧な（俺的に）喋り方ではなくなっていた。
「見てわからぬか？ゴーレムを作ってるんだ」
ゴーレム？見てわからんよ。
「ん？分からんか？…これだから愚図は…」
ルルフがため息をついた。

「ゴーレムというのは生命土と言うものを使って人型に練り上げる事で生命体に変えることができるスグレモノなのだよ」
ルルフが生命土？を練り上げ、人型にしていく。

出来上がった物は人型だが…人間ではない何かだった。正直、細かい所は何もしていない、お粗末なマネキンの様だ。

ルルフが懐からチョークを出し、床に円を書いていく。
「あぁ！カーペットが！」
「大丈夫だ！後で元に戻る。」
円の真ん中に生命土を使って作り上げた人形を置く。
サイズは１ｍ５０ｃｍ前後という所か？

「汝、我が問いに答えたまえ、今此処に生命を与えん。」
なんか話を人形にしている。
『創造（クリエイト）！』
人形から煙りが溢れ出し、白いチョークの円が生き物の様に動き、人形を覆う。
「ククククク、上出来だ」

煙りが吹き荒れる中、人形の体は少しづつ変化を起こしていく。紫色の肌は白く透き通り、髪の毛が生え、白銀のロングヘアーになる。体に黒い物質が生え服の様な物を形成する。そして、目、鼻、口と体の一部が作りあがる。

煙りが晴れる頃には美しい少女の形が出来上がっていた。その少女はこちらを見ると微笑み、いや笑ってルルフに飛びついた。

「あうー」
少女が鳴いた。
「むっ？」
抱き着いていた少女を引き離し、ルルフは少女の目を見た。

「…ッ！しまった！」
ルルフがいきなり大声を上げた。
「どうかしたんですか？」

宋二が尋ねた。
「…魔界との魔力濃度の差を忘れていた……恐らくこのゴーレムは喋ることも出来ず、不完全な知能で生きるしかない…」

「どーするんですか？」
宋二が訪ねた。

「あぅぁ…」
少女がかなり悲しそうに…まるで「捨てられた猫の様な愛らしい目」をしていた。

「大丈夫…捨てはしないさ」
ルルフが少女を抱き寄せた。
「命を創って、要らなくなったら捨てるなどという事は…私はしない」
そう言っている彼女の顔はとても不思議な顔をしていた。ルルフの表情は怒りを、憎しみを、また悲しみも、そして懐かしさと損失感をも現していた。

「あう！」
嬉しそうに少女が抱き着いた。
「ん？そういえば名前を考えなければ」
悩んだ顔をした。
「そうだな……フィでどうだ？」「あう？フィ？」
少女が不思議そうな顔をする
「そうだ、フィだ。昔のある伝説の王の名前だ。これからよろしくなフィ」
「あう！」
フィは元気に返事をした。それを見て、宋二は微笑んだ。

「あれ？家に新しい家族？」
後で気づいて驚愕した。

第二話　非日常、成立（下）（後書き）

第三話は明日です！

第三話　魔鬼那、徘徊（上）

「はぁはぁはぁはぁ」
私は逃げていた。どうして？なんで？私は何で此処に居るの？
ギィギィと不気味な不気味な怪音が鳴り響く。走るスピードを遅めてはいけない。捕まったら…何が起こるか解らないが、死ぬんじゃないか？それとも喰われる？
「た…助けて…」
涙が流れた。止められない。

何でなの？

今日もいつも通り学校へと行って、いつも通り帰ったはずなのに。
何時、こんな非日常に巻き込まれたのか。

泰子は喰われた。

目の前で血を撒き散らせながら。

由井は押し潰された。

「何か」に腕で叩かれ、潰された。

「嫌、嫌ぁ」
泣き言を言いながら「何か」から逃げる。足が限界を告げる。ガクガクと震える。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……

ガッ――――

躓いてこけた。駄目！早く立って……

『シャラララララ！』

鈴の音のような遠吠え。背後に「何か」が迫る。ゆっくりと、しかし、獲物を逃がさないように歩いて来る。

「ひっ」

立てない。立って。立てないよ。立つの！立てないの！！

体が動かない。振り向く事すらもできない。

そしてゆっくりと影が近づき――――

ベチャッ！！――――

私の体は潰れたトマトの様になった。

「ねぇ宋二君、知ってる？」
優香が机に突っ伏す宋二の顔を除いた。学校へ来て早々の話しだ。

「ん？何が？」
「都市伝説、だよ」
都市伝説？興味はない。だが、優香がその手の話しが好きなことを宋二は知っていた。

「あのね、この学校の女の子が数人眠ったまま起きられなくなって……意識不明になってるんだ。普通ではありえないことらしいんだけどね…」
そういって優香はバインダーを取り出した。使い込まれている様でかなりボロい。バインダーには「江西周辺の怪奇」と書かれている。ついでに、江西と言うのはこの町の名前のことだ。
「人が何の前触れもなく一度寝たら二度と起きられなくなる、永遠に悪夢の中……怖いでしょ？」

「…うん、まぁね」　宋二は曖昧に返事をした。

「それでね、それで…」
そこから先は覚えていない。適当に頷いて話を終わらせたからだ。しかし、この話を聞き宋二は思ったのだ。
魔鬼那の仕業じゃないか、と。

「ただいまー」

玄関を開ける。
「お帰りー」
「あうあうー」
家の奥から返事が聞こえる。奥へ進むとすっかり住み慣れたルルフと土人形（ゴーレム）のフィが返事をした。

「ルル、少し聞きたいことが…」
宋二が少し間を置いた。
「魔鬼那の事だろ？昨夜、確実に居たな」
「知ってたんですか？」
「当たり前だ、愚図、そしてルル様と呼べ」
蹴りが横っ腹に命中した。
ルルフが黒いゴシックドレスの胸元から紙を取り出した。変な所に入れたものだ。
「夢の中……いや人間の幻想に侵入し、悪夢に変える。その後、悪夢の中で人間の魂を喰らう。魂のなくなった人間は起きられなくなり、永久的に眠りつづける」」
「あう？」
フィが疑問の声を出したが無視する。
「この魔鬼那の能力は厄介だ。奴らは実体をを持たない。故に奴らは精神世界で捩じ伏せるしかない」
そこまで言われて宋二は気付いた。
「つまり…一度、夢の中に入れさせて夢の中で戦えってこと？」
「そうだ…しかも噂によると奴は若い女性しか狙わない…厄介だ、お前は男だし」
もし俺が女だったらおびき寄せるための餌になってただろう。男に生まれて良かった！

ルルフはそう言ってから紙を宋二に渡した。そこには【第９６３３２回、精神体型の魔鬼那】と書いてあった。
「過去の死神の報告書さ」
中には精神体型の魔鬼那について書いてあった。
第一、精神体型の魔鬼那は実体を持たぬ為、相手の精神世界に引き吊りこまれる必要性がある。また、精神世界においては、心の強さが、力に直結するため未熟な死神では恐らく勝てないだろう。また、相手の魂を随時、喰らっている為、長期戦に持ち込まれると魂が引き抜かれ死ぬだろう。
「……こんな奴にどうやって戦うんですか！？」
「ククク ッ明日になれば分かるさ…」
はぐらかされた事に疑問を持ったが結局、ルルフに質問することも出来ずその日は寝てしまった。

翌日。
朝起きたらルルフとフィが居なかった。少し不安になったが昨日の事を考えると何かの作戦ではないか？と思った。

学校にて。
朝のＳＨＲ中にそれは来た。担任の教師が連絡をする場面で言った。
「今日、皆さんにお知らせがあります…えーと、転校生が二名、このクラスに編入されることになりました」
クラスがどよめいた。中には「女子か！？美人か！？」と騒ぎ立てる馬鹿が一名いた。その馬鹿の名は充と言う。
「…いやな予感がするな…」　小さく独り言を言った。
この場合、前日のルルフの態度としてまさかの「転入」など有り得ないことではない。
（たのむ…！それだけは勘弁してくれ！）
そんなラブコメみたいな展開、俺は望まないぞ！

ガラガラガラ――――――

ドアが開いた。
開いた瞬間、場のボルテージは最高に達した。俺を除いて。
そこには美少女居た。見覚えのある美少女だ。黒髪、黒目と一瞬解らなかったが、まさしく、あれは！
「転校生の櫛也（くしや）　瑠々（るる）だよろしくな」
グハッ！ルルフそのものだった。和名に当字してあるが、ルルフそのものである。
「私の他にも転校生が居るぞ…紹介しよう」
瑠々が手招きした。中にもう一人見慣れた顔を連れてきた。フィだ。　しかし、やはりフィも髪の色が白銀から黒になっていた。
「コイツの名前は櫛也（くしや）　風亥（ふうい）。私の親戚だ」

「あぅ」

クラスメイト（やはり主に男子）がざわめいた。所々から「美少女が二人！？」とかいう声が聞こえた。

「あうあう？」

「ああ…そうだな、風亥は喋ることが出来ないんだ…仲良くしてやってくれ」

またクラスメイトがざわめいた。今度は女子もだ。話せない。という言葉にざわめいた。

「では、瑠々さんはあの席に座ってください、風亥さんはあそこで」

瑠々の席は俺の隣になった。なんの因果だ。神の嫌がらせか？

「ハジメマシテ、よろしくな」

そう言って握手してきた、握手した瞬間に紙を宋二の手に置いた。

紙には「喋ったら殺す！」と赤字で書かれていた。俺は一気に血の気が引いた。

学校生活まで支配されるのか…

俺に休まる場所はないのだろうか？

第三話　魔鬼那、徘徊（上）（後書き）

学園編に入りました！！

第三話　魔鬼那、徘徊（中）（前書き）

今回は短いです。

第三話　魔鬼那、徘徊（中）

学校のクラスはいつも以上に盛り上がっていた。人が輪を為し、中心には女子二人。

「ねぇ、瑠々さんの趣味は何？特技は？好きなタイプは？恋人居る！？好きなプレイは！！？？」

「後半の質問はおかしいだろ！」

充が転入生である瑠々に質問をし、輝がツッコミをいれたいた。風亥は別の方で質問されていて、身振り手振りのジャスチャーで答えている。

「ふむ、趣味はピアノ、特技は絵を描くこと、好きな＜ぷれい＞とは何だ？」

馬鹿正直に瑠々が答えた。

「ぐふふっ、プレイってーのは…」

「やめろ！」

輝が充にげんこつを落とした。

「何さ！みんな私はMじゃないよ！殴っても興奮しな……い…いや、するかも」

充がにやけた顔をした。若干、輝が引いてる。

「に、しても。まさか、宋二が美少女に反応しないとはね……病気？」

「いや、俺、病気じゃねーから、つか普段の俺は美少女に何をするんだ？」

「あうあぅ？」

風亥がこっちを見た。

「お、宋二じゃないか、ちょっと話があるから屋上に来てくれ」

瑠々が言った。

「知り合い？まじ？しかも、屋上で話？むむむむっ！私のラブセンサーがバリ3だぜっ！」

充は興奮気味である。端から見ている優香は苦笑いをしている。

「いや、そんなんじゃねーから」

「否定する辺りが怪しい！やらしい！エロイ！！…何時からそんなの子になったのかしら！？私は宋二ちゃんをそんな子に育てた覚えは無いわよ！」

どこの母さんだよ！と輝が突っ込んだ。輝…お疲れ様です。

「とりあえず先、行くから！」

宋二は屋上に向かって走り出した。これ以上、何か聞かれたらされたら体がもたない。

「いやー青春だねぇ～」

充が感慨深く言った。

「……いや、たぶん違うだろ」

充を輝が「何かよく解らない馬鹿を見る目」で見ていた。

学校の屋上は基本、生徒は来ない。人気がないので密談するには良い場所である。そこに、宋二は立っていた。

「おう、愚…宋二」

初めて名前で呼ばれた。振り向けばそこに瑠々と風亥が居た。

「…そっくりさんでは無く、本当にルル…様とフィなのか……ですか？」

「ああ、見れば分かるだろ？」

「何で？」

「何が？」

説明して欲しい事が多すぎる。まずは大切な事を聞く。

「何故、ここに二人が居るんだ？」

「クククッそれはな…魔鬼那がこの学校に住んでいる事が判明したからだ」

「え？」

明らかに動揺した。人間、信じたくない言葉は頭に入りにくい。それを宋二は直に感じた。

「この学校に魔鬼那！？それは本当なの…ですか！？」
敬語が使いにくい。
「あぁ。憶測でもない。事実だ。最近の事件は此処を中心にして発生している。此処が一番、確率が高い。
また、この学校の女子生徒が襲われたこと、人が襲われる場所が徐々に西へ通り現在は此処を通過中のこと、全てにおいて此処程確率の高い場所はない」
「…ッ！？じゃあ何でこの学校ルルは来たんだ？透明にでもなって学校に侵入すれば良いだろ！」
つい大声になった。敬語も無い。ルルフを呼び捨てにしてしまった。だが、そんな宋二をルルフは咎めなかった。
「いや、この魔鬼那は女子生徒しか狙わない…そして、この魔鬼那は実体を持たないからおびき寄せなければならない。だから此処の生徒となったんだよ。分かるだろ？」
「な…！？」
まさか此処に魔鬼那が来るとは。早く退治しなければこの学校の生徒が死ぬかもしれない。
実際に3人死んでいるのだが、被害を増やす訳にはいかない。自分が住んでいる場所だ。誰にも侵されたくはない。
「今日、決着をつける…お前も来い」
「……わかりました」
「ん？怖くはないのか？私から言っといて何だが、「死ぬ」可能性もあるんだぞ？」

さも当たり前に「死ぬ」と言った。本当に死ぬかもしれない。俺の様な力のない人間じゃ魔鬼那に太刀打ち出来ないかもしれない。

「いえ…行きます」

たとえ約に立たなくても。続けられない言葉を隠した。

「……なら良い…」

なにかに感心した様に瑠々が言った。

（クククッ私の下僕に相応しくなってきたな…）

密かに瑠々はこの魔鬼那の出現に感謝した。

第三話　魔鬼那、徘徊（中）（後書き）

次回！バトル物になるのか！？

第三話　魔鬼那、徘徊（下）

「ふん」
暗闇でルルフが鼻を鳴らした。今、ルルフは黒髪、黒目から赤い髪に赤い目と元に戻っていた。髪の毛等が黒くなっていたのは魔法だろうか？
ルルフは鎌を持っていた。しかし、その鎌は薄く半透明である。
「どうしたものかな」
ルルフは一人、暗闇に居た。

数分前、学校が終わり、１１時、夜にて。

「行くぞ…」
ルルフ、フィそして宋二の三人が学校に潜入していた。
（ばれたら退学じゃないのかな…）
宋二は胸の内で密かにそう思った。
「あう」
「…そうか」
「あう」だけで意味が分かるルルフはすごいと思う。少なくとも俺は分からない。
「私が先行する……離れてついて来い」
「わかりました」
「あう！」

言葉の通りルルフが少し前に行き歩きだした。それを追っていく。
「そうだ、見つからないように…」
ふと気づいたかの様にルルフが振り返った。そして、フィと宋二の頭に手を乗せた。フィは問題ないが、俺はルルフと身長差があるため少し背伸びしている。
『消えろ(ステルス)』
するとフィが見る見る内に体が透けていき、ついにはフィは見えなくなった。
「自分以外には見えなくする魔法だ…私にも見えなくなるから注意しろ。」
そう言ってからルルフがまた歩きだした。

学校を一周した。しかし何も出なかった。
(もう出ないんじゃないか?)
しかし、まだルルフは歩き続けた。そして宋二は少し目を離した。

ピイイイイィィィィィィン!

バタッ!
異音がしてルルフが突然倒れた。
「ッ!?」
精神体の魔鬼那に催眠させられた様だ。精神体型の魔鬼那は肉体が無いと書いてあったので、物理的には出ないはずだ。
「予定…通りか?」

足元でルルフが寝ていた。後はルルフの精神力にかけるしかない。

「ふむ」

暗闇だ。一寸先も見えぬ程の黒。足元が見えない。

「ここが精神世界か？」

『いンや？』

目の前に発光する約５０ｍの光る巨人が現れた。青く発光している。

「ククッ成る程…貴様が【虚実（スペクター）】か？」

『えエ、そウですヨ？』

相変わらず魔鬼那の言葉は片言である。

「…魔鬼那タイプ、【虚実（スペクター）】……魔鬼那の中でも相手を催眠させる事に特化したタイプだな…」

『よク、ゴ存じデスね？』

「当たり前だ…二三度、殺った事があるからな。能力は貴様の３分の１程だろうがな！」

手に粒子を集める。

「召喚（サモン）！！死鎌（デスサイズ）！」

ルルフの手に大きな鎌が現れた。髑髏がついており不気味だ。

「死鎌（デスサイズ）…でスか。でモ！」

暗闇がより深くなり、全く見えなくなった。

「ホんトウの精神セ界へおおクリいタシまショー！」

「ルル様は大丈夫なんだろうか？」　宋二が言った。現在、宋二とフィは倒れているルルフの前で見張りをしていた。

「…あう～」

フィが不安そうな顔をしている。
「大丈夫…か？」
二人でルルフの前で座っていた。

「…何だ、ここは？」
ルルフは気付くと古い洋館の一部屋の一室に居た。見渡すとたくさんの絵画が飾ってある。
「……」
部屋にある物を確認していく。汚い古本、かびたパン。不衛生だ。そして、本棚の下に写真立てが落ちていた。それを手に持ってみる。

（……何だ？）
写っているのは初老の男性、美しい女、そして幼児。
見覚えのある3人だ。しかし思い出せない。

『オ気ニ召しタカな？』
「…ッ！？」
後ろに光る人間型の魔鬼那が立っていた。

「まったく…！趣味の悪い奴だな」
『ほメコトばとシテオきマシょウ』

振り返り間を作る。右手を突き出し、左手を手前に引く。
『鎌がナクなっテも…ヤるンデすか？滑稽デスね！？』
光る魔鬼那は姿を変えていく。魔鬼那は液体のように熔かし、その後、体を構成した。

「ふん、不気味な奴め…！」
精神世界において【力】とは【心の強さ】となり、視覚的な恐怖は相手の力を削ぐことになる。

溶けた魔鬼那は女の姿になった。写真の女だった。
『ふふふっ』
笑った。

「ふん、何のつもりかは知らないが……」
ルルフは喋りながら近くにあった花瓶を持った。花柄の白い花瓶だ。
「はッ！」
花瓶を魔鬼那に投げる。花瓶は魔鬼那の顔に当たったかのように見えた。だが顔に当たる前に何かに捩曲げられ砕けた。

『ふふっどうしたの？此処ではコンナもの意味が無いわ』
魔鬼那の声は透き通るような美声でさっきまでとは違い喋りに違和感がない。

「ふん、わかっているさ」
砕けた花瓶を見た。無残に捻れた破片が落ちている。
（あれは…空間変質系か…）
『ふふふっ貴女の…分かってないのかしら？コレは貴女の心の中深くの世界よ』

「…だろうな」
見渡す。鈍器はこの部屋に結構ある。使える物は……
『本当に分かってるのかしら？この顔に見覚えもない？』

相手の意中にはまってはならない。思い通りになるな。無視しろ。
自分に言い聞かせた。

『…実の母の顔を忘れるなんてね』
「…ッ！？」
振り向いてしまった。まさか！？コイツは！？

「…お母様……？」
『そう……貴女を産んだ…母の顔よ』

一方、精神世界での戦闘に介入できる訳でもなく待機している二人が居た。
「はぁ…」
不安であると共に暇でもある。
「あうあう」
フィが抱き着いてきた。突っ込む気力も湧かない。
「あう！ああうあうー！」
「へ？何？」
フィが必死に何か伝えようとしている。その顔は真剣そのものであり、茶化す事もできない程だ。
「あぅ…あまぁ、ま、き、にゃ……」
「魔鬼那？」

フィが必死に喋ろうとしている。何とか意味が通じる程度だ。
「魔鬼那がどうかしたか？」
質問するとフィは左手の指を２本立てた。
「２…２か？……えーと……２匹か！？」
コクコクと頷いた。
「な、ヤバいぞ！今、二人しかいないんだぞ！？どうすんだ！？」
「あうあう！」
フィは自分の胸を自慢げに叩いた。
「任せろ？」
「あう！」
今のは「あう！」はＹＥＳの様だ。
「無茶だ！一人でどうにか出来るような奴じゃ」
ピィン
赤い閃光が宋二の顔の横を通った。
「あう！？」
よく見ると廊下の先に黒っぽいクラゲの様な生物が浮いている。
「早い！もうきたのか！？」
宋二は近くにあった消火器を持った。
「くそッ！来るなら来い…！魔鬼那め…！」
宋二は迫り来る魔鬼那に消火器を向けた。

「母様…！？」
『そう母さんよ…』
惑わされている幻覚だ。このままでは感情を縛る鎖が引きちぎられそうだ。

「…貴様は母様ではない！変体するとこも見せられた！騙すならもっと良い手を用意しろ！」
『ふふっ別に良いの…偽物でも』
「何…？」
『惑わせれたら充分』

ドスッ！！
「かッ……がはッ！」
後ろから槍が飛んできた。紫色に固形化した魔鬼那の体液だ。体を後ろから貫通し足元に血だまりが出来ていた。

『ふふふっふふはははは！』
心地好さそうに魔鬼那が嘲笑(わら)った。

「こんな…初歩的な物に引っ掛かるとは……ぐッ」
血が溢れ出た。ここは精神世界だ。精神世界での体の損失は【魂】の損失だ。傷を受ければ魂が擦り切れる。つまり、ダメージが大きければ大きいほど魂が消費され、下手をすれば…死ぬ。

『ふふふ…もうすぐで死ぬわね？…安心して…貴女の魂は私が頂くわ』
景色が黒ずみ始めた。意識が遠退く。

「く…そ……」
そして倒れた。

『イイ！イイ！』
クラゲの様な魔鬼那が宋二に接近した。

「あう！」
そこにフィが飛び出し、跳び蹴りを喰らわせる。

魔鬼那とフィが奥へ吹っ飛んだ。そして、蹴りは魔鬼那の皮膚を貫通した様だ。しかし、大したダメージにはならないみたいだ。
『ジャマ！オマエ！死ネ！！』

ビームだ。半透明の魔鬼那の中心部分にある赤い球からでる閃光は一撃でコンクリート性の壁をぶち破る力を持っていた。
その一撃がフィに迫る。

「危ないフィ！」
「あうッ！」
フィは右の拳を左から右へ凪(な)いだ。
ビームはフィの拳に弾かれ右の壁へ向かった。壁が粉砕される。

「へ？」
『ハァ？オマエ！ナンダ！』
ビームを連射する。しかし全て弾かれていく。

「すげぇ…」

宋二は自然と感嘆の声を出していた。
造作もなくビームを弾く少女と空飛ぶクラゲ。戦いは最早幻想の様だ。

「げふッ！」
口からたまった血を吐いた。槍は腹に刺さったままだ。
『ふーん、まだ生きているのかしら？いい加減に死ねば良いのに』
美しい女の顔が酷く歪んだ。殺す事を、喰らう事を楽しみとする顔だ。

「生憎、私は…頑丈なんでな…」
動きが鈍っているのが分かる。このままでは……

「衝撃（ディメンション）！」
苦し紛れに魔術を使う。ルルフの手から衝撃波が生まれ、洋館の窓ガラスが砕け散っていく。しかし、魔鬼那は無傷で立っている。

『無駄よ…残念ねぇ…もう、おしまいかしら？』
楽しむ様な顔をする。

「ちッ…こいつは使いたくなかったが……」
『ハッタリは良いわ…いい加減に楽になりなさい！』

魔鬼那の腕から槍が１０本程、生まれる。槍は紫色のルルフを貫いた物と同じだ。
『うけなさい！』

いくつもの槍が一斉に飛んで来る。
「同調（シンクロ）……死鎌形態変化（デスサイズ・フォルムチェンジ）…」
ルルフの体が光る。しかし、槍は勢いを止めずルルフの体を貫いた。
『ふふふふっふはははははは！！』
魔鬼那の声だけが響いた。

「あう！！」
フィの蹴りがクラゲ型の魔鬼那を吹き飛ばす。
『ガガガガ！！ギャッ！』
壁に減り込んだ。
『う、あう！！』
フィは相手に飛び込み蹴りをもう一度喰らわせる。
『ガ！マテ！』
怯んだ相手に　蹴りをもう一度。そして右手で殴り、左で殴り、右、左とせわしなく殴り続ける。
『ギャッ！ベッ！ギッ！』
そして後ろに少し下がる。前にいる魔鬼那はもうボロボロだった。
『ヘッ！』
離れたスキにビームを放とうとする。
「あう…！」
地面に落ちてあるコンクリートのカケラを手に取る。そしてそれを指で思いっきり弾く。コンクリートの弾丸はビームを放とうとする魔鬼那の赤い球を砕いた。
『ギイイィィィエエエエ！』
凄い叫び声だ。
「あう！」

そしてフィが前に跳び空中で二回転半し、蹴りを放つ。
空中での回し蹴り。それは人が考える威力の上を行く。蹴り技の中、最も危険な技に分類されるだろう。

「あう！！」
『ギャベッ！』
ベチャッという音がして完全に魔鬼那は潰れた。

「…終わった？」
壁に隠れていた宋二が声をかけた。戦力外は足手まといにならないように離れている。

「あう！！」
フィは満面の笑みを見せた。だが、体中に魔鬼那の血がかかっており、一見するとスプラッター映画のキャラみたいだ。

「ふぅ…よか…っ…た」
宋二は体の感覚が抜ける様な気分になった。そして…
倒れた。

『ふふふふふふ、では頂くとしましょう！』
ゆっくりと美女の姿をした魔鬼那がルルフに近づいた。
「く…」
『あら…？まだ喋れるの？』
魔鬼那は手から槍を一つ生み出した。

「召喚（サモン）…死鎌極（テネブリス・デスサイズ）……」
ルルフの手から気流が生まれた。そして竜巻となり魔鬼那を襲う。
『何なの、コレは！？』
「ク…ククククク…クハハハハ！！」　ルルフが立ち上がった。
「喰らうが良い！我が下僕の魂の一撃！！」
ルルフが手を上に上げ、風を手に集める。空中で光の粒子が生まれ手に集まる。そしてソレは鎌を生み出した。今までの鎌とは違う。血のように真っ赤な鎌だ。
『何！？何をしたの！？』
魔鬼那は状況が掴めていなかった。
「ククク、こいつはわが下僕、宋二の魂を借りて作る武器だ。…安心しろ一度使えば1日は使えなくなる…だが！」
鎌を振り上げる。
「コイツは手加減出来ない！」
鎌の刃が赤く光った。
『ひっ』
ヤバい、ヤバい、ヤバい！！
アレはダメだ！！
魔鬼那は本能的に危険性を感じた。そして逃げ出そうとした。だが…
「死んだ母様を語った罪だ！！死ね！！」
鎌を振り下ろすと刃の先から真空の刃が生まれ、それは魔鬼那へ

飛んで行った。

『あフ！』

魔鬼那は真っ二つに斬られた。そして切れた断面から炎が生まれ相手を焼き尽くした。

「コイツは…ククククッ、良いな！！さすが宋二だ！純度が他とはまるで違う！！」

空が崩れ、壁が溶け、視界にある物全てが消えていく。

「クククククッハハハハハ！！」

勝者の笑い声だけが暗闇に響いた。

第三話　魔鬼那、徘徊（下）（後書き）

話のストックが切れた！
ということで次回は少し遅いかも……

幕間（1）

「うーん…」
優香が悩んでいた。
「どうしたんだ、優香？」
聞いてみる。

「いや宋二先輩、あの都市伝説、『永遠の悪夢』の被害者が起きはじめたんですよ…何か在ったとしか思えません…」

「ん？『永遠の悪夢』？そんな名前がついてたのか？」
通称『永遠の悪夢』とは魔鬼那【虚実（スペクター）】が起こした事件が都市伝説と化した話だ。

「そーですよ！巷では話題の都市伝説でした！！…で本当にどうしたんでしょうね…」

実の話、ルルフが主犯の魔鬼那を倒したためその魔鬼那が溜め込んでいた魂達が主の元に帰って復活したのだ。
…まあ、こんな話は人に出来ないが。

「おう、宋二じゃん！真面目な顔してどうかしたの？生理？」
「俺は男だ！」
馬鹿の充が朝っぱらからぶっ飛んだ話を始めようとした。

「だって宋二が真面目な顔をするときは××××をする時と××××を見るときだけでしょ？」
「何ていう目で俺を見てんだ！！」
一発叩く。

「む、どうした愚…宋二。朝から人を叩いて」
「あう？」
「叩いてません、ツッコミです」
「つっこみ？とは何だ」

瑠々（ルルフ）と風亥（フィ）が来たようだ。一緒の家から出るところを見られると変な誤解を生みそうなので時間差をつけて家から出発している。

「おう、宋二。女ばっかり集めてハーレムでも作る気か？引くわ…」
「お前も何だよ輝！」
皆が俺をネタにする。やめろ！
「な、優香ちゃん、宋二は変態だもんな？」
輝が優香に問い掛ける。

ちゃんとした回答を…俺は変態じゃないって言ってくれ！

「あ、もうすぐ授業なんで帰るね！」
そういって優香は逃げ去った。
おい！！せめて否定してくれ！

「可哀相に宋二…でも大丈夫さ、私も変態だから…」

いや、充。お前が発端だろ？

そう心の中でツッコミを入れた。

「弁当は皆で食べると美味い……それは認めよう」
昼時、宋二の周りでは、輝、充、瑠々、風亥、優香が集まっていた。

「だけどコレは多すぎだろ！！」
屋上。それはオアシス。学園の喧騒から離れることが出来る唯一の場所。
誰もいない（優香はいつも居る）所でメシを食っていたら、急に皆が集まりだし、今に至る。
ワイワイがやがやとうるさく飯を食っている。それは良いのだが……

「お、輝のタコさんウィンナーもーらい！」
「充！人の弁当のオカズをとるんじゃねー！」
「えー良いじゃん、オカズならコレあげるよ？」

そう言って充が封筒を懐から出して、輝に渡した。
「？何だよコレ？」
「コレはね……」
充が恥じらうような顔をする。輝の顔が少し赤くなったのを優香は見ていた。

「私の……セミヌード写真だよ。毎日のオカズにしてね？」
「ゴフッ！ななななな、何！？」
「嘘……ムフフフ引っ掛かったー！！」
輝が封筒を開けるとレシートが束になって入っていた。

「てめぇ！！充！！後味の悪い嘘をつくな！！」
輝が馬鹿（充）を追いかけ回していた。

「こら！そこ！走り回るな！埃が舞うだろ！！」
飯を食べている時の埃は勘弁してほしい。飯がマズくなる。
「あうあう！！」
風亥が賛同の声を上げた。
「……見事なまでに五月蝿（うるさ）くなったな」
瑠々と優香は座っていた。
「うん…瑠々先輩は行かないの？」
現在、４人の取っ組み合いが発生している。

「行くわけないだろ？あんな場所に」
「だよね…」

「こら！逃げるな！！」
「やーだよっ！」
「お前ら騒ぐな！！」
「あう！」

騒がしい、だけど心地好い。悪くは無い。まるで家族が出来たみたいだ。
「くくくくくっ」
瑠々が笑った。今まで見たことの無いような清々しい笑い方だった。

『ユルセナイ！許セなイ！許セない！…許しテは置ケヌ！』
土を破り、墓を砕き、腐り果てた人が現れた。右腕は腐り落ち、左は辛うじて繋がっているだけだ。墓地の地面を破り、現れたソレは腐臭のする動く死体だ。

「よう、【復讐者（タキシム）】…」
『誰ダ！貴様ハ！』
腐り果てた動く死体の前に黒いフードを被った男が居た。男の顔はフードで隠れて確認することは出来ないの。
「【魔鬼神の使い《マキガミノツカイ》】って言ったら分かるかな？」
『魔鬼神（マキガミ）様ノ……！失礼シた！！』
死体が恭しく礼をした。

「いいんだ、いいんだ……【復讐者（タキシム）】…俺はあんたの能力は高く評価してるんだぜ？もっと【魂】を食って強くなってもらわなきゃ困る…」
『承知シた…』
動く死体……魔鬼那、タイプ【復讐者（タキシム）】は街へと歩き出した。

「ふ～ん、あんた＜あんなの＞が良いんだ？」
「奴は所詮、捨て駒だ…別に死んだって…除霊されたって構わないさ」
黒いフードを被った女が現れた。女も男と同じフードを被ってお

り顔は確認できない。ただ、身長と声からして若いことが分かる。
「ふん、血も涙も無いわね」
「そういうお前だって、【虚実(スペクター)】と【水母(リヴァイアサン)】を2体同時に消費しただろ？」

黒フードの男が黒フードの女を指差した。
「ふん、【水母(リヴァイアサン)】はレベルが低い奴よ」
「そういう問題じゃないがな…」

「で、どーすんの？」
「何が？」
「【復讐者(タキシム)】よ…アイツでは死神には勝てないわ」
「分かってるさ…だから捨て駒さ…」
「本当に酷い奴ね、アンタ」
黒フードの女が一枚の紙を取り出した。
「コレを渡しとけって、イクスが言ってたわ」
「貰っておこう」
黒フードの男が紙を受け取った。すると男は笑い出した。
「…くく、ハハハハハ！」
突然、黒フードの男が笑い出した。あまり、心地の良い笑い方ではない。

「ん？何？何？教えて？」
「死体が大量に埋まってる場所が此処に在ったんだってよ！」
「ふーん、もしかしたら勝てる？」
「ハハッ【復讐者(タキシム)】の能力を最大限に活かせたらな」
黒フードの男が黒く笑いながら答えた。

深夜、暗闇でうごめく死体がいた。
『我ガ体は既ニ限界ダな…替エノ体ヲ用意せネば為るマイ…』
復讐(タキシム)者は地面を　見た。
ここは江西市の江西遺跡。まだ発掘されていない物がたくさんある最近発見された遺跡だ。
『さテ…替ワるカ』
復讐(タキシム)者は地面に腕を突き刺した。そして…倒れた。すると、ついさっきまで動いていた死体は灰になり、消滅した。

地面から腕が生えた。白い骨の腕だ。その腕は地面を破り地上を求めはい上がる。
全身を地上に出した。
『ハアァ……！成功カ？』
地上に現れた動く骨人間。それはカタカタと動き言葉を発した。
『ケタケタケタケタ！明日ノ夜が楽しミダ…！』
骨は…復讐(タキシム)者は不気味に笑った。その笑い声は暗い夜に響き渡った。

第四話　復讐者、破砕（前）

「何だ、コレは…」
朝、学校へ登校中の出来事だ。ルルフは電柱の下を見つめている。
そこにはダンボールの箱が一つ。

「あう？あうあぅあう？」
後ろからフィが駆け寄ってきた。

「む？そうか？いや、爆弾は無いだろう。……しかし」
ルルフが足元のダンボールを見る。普段はこんな場所にこんな物は無い。不自然だ。しかもダンボールは汚れていない。置いてから日も経ってないだろう。

「…仕方ない。開けるぞ…！？」
ルルフが手を伸ばしダンボールに触れた。

「あうあう！？」
フィがあわてふためいっている。危険だと思っているようだ。
そしてルルフはダンボールの蓋に手をかけ…開けた。

「む！？コレは…！？」
ルルフは中に入っている物を見て驚愕した。

「はぁ～眠い…」

宋二があくびをした。それを優香が見ていた。
「先輩…まだ授業もやってないんですよ？もう眠いんですか？」

「いやねぇ、最近の若い奴は」
「お前も若いだろ！」
充に輝がツッコミを入れた。
「いやもう、ワシらはもう歳で…眠ぅてたまらんのじゃ！」
「ボケるなよ…」
輝はグロッキーになっている。
「あれ？そういや瑠々先輩と風亥先輩は？遅いですね」
そういやそうだ。いつもなら俺の3分後ぐらいには学校に着くのにな。

「うむ、おはよう」
「あう」
噂をしてると本人達がドアを開け入ってきた。

「どーしたの？遅いねぇ。何かあった？」
充が瑠々に質問した。
「…いや、何でもない」
（ふーん、こりゃ何かあったね）
充は瑠々の遅れた理由を可能性の分だけ、思いつく全てを上げてみる。
（事故？寝坊？いや生理？…いやコレらじゃ無い…）
充は凄まじいスピードで可能性を排除し新しい可能性を生み出し、推考する。
「……」
「どうした充？真面目な顔して？」
輝が質問した。が、充はそれを無視し推考する。
（……そうか！）

急に顔を上げて瑠々を見る。
「そういやさ…もう時間だぞ？優香は帰らないとまずいんじゃないか？」
「…あぁ！ホントだ！！じゃ、帰るね！」
そう言って優香は廊下を走って出て行った。

「瑠々こねぇな？何故だ？」
輝が屋上で充に言った。今では昼飯は屋上で食べることになっている。
「ふふふん、私は…判るよ」
充が勿体振っていった。
「ふーん。で、迷探偵ミツルさんはどうお考えで？」
「む？なんか字が違う気がするんだが……」
「気のせいだ…」
二人の会話に宋二が割り込む。

「どうせ充の事だ…アホな事考えてるんだろ？」
「失敬な！」
充が反論する。
「ゆーかは判るよね？私アホじゃないよね？」
「うーん…たぶん（アホだとおもう）」
後ろに言葉にださない物が入る。ただ、充はそれを勘違いし、「だよね！？だよね！？」と仲間が出来た事を喜んでいる。

「ズバリ！私の推理では…瑠々ちゃんか風亥ちゃんかが恋に落ちた思う！あの不自然な動き！まさしくそう！私のラブセンサーに狂いは無い！！」
「そんな、馬鹿な…」

「いや！女は以外と惚れやすい物！ちょっとした弾み！そう、例えば「パンをくわえ、走って学校に登校しようとして街角で男の子とぶつかる」なんてシチュエーションは！！……も、萌える…！」
「お前は感性が古いな…」
輝が静かに立ち上がる。

「何を！お主はこれ以上の萌えるシチュエーションを出せるというのか！」
「出せる！！」
そういって輝は充に詰め寄った。
「例えば！「学校の放課後の教室で掃除する孤独な委員長（女）を手伝う男子」とか！！「学園祭で無駄にはしゃぐ女子に気を使い見えないところでサポートするやや不良の男子」とか！」
「む！クソッ！萌えるじゃないか！！」
論議が意味不明な方向に走っていく。うん、コイツら馬鹿だ。久しぶりに輝が馬鹿に見えた。

「あ！あれって瑠々先輩じゃないですか？」
「「何ッ！！」」
充と輝が振り向いた。そして、優香が一つの場所を指さした。
「あ、ホントだ」
俺はそこを見た体育館の倉庫の窓、そこに瑠々の顔がチラっと見えた。

「体育館の倉庫！？あそこは…むむ、凄いイベントの予感！エロイベントだよ！アレ！！」
「…いや、もういい。冷めてきた」
充の行き過ぎた発言で輝のテンションは元に戻った、というか冷めた。

「でも、何してるんでしょうか？宋二先輩、見に行きませんか？」
「ん…ああ…えーと」
どうしようか？ここで行ったらまるでストーカーじゃないか？いや、考えすぎか？でもなぁ……
「よし、行くか」
結局、好奇心に負けた。
「俺も行く」
冷めきった輝が言った。大人数でも良いか。ばれたら罪が拡散するし。
「私も行くよ！だって…はぁはぁ」
でも、興奮している変態は勘弁してほしい。

「…作戦目標に到着、コード３・２ｒ（ミ・ツー・ル）ミッションを開始す…ふぎゃ！」
「馬鹿な真似するな」
輝が充にゲンコツを落とした。
「静にしてください、聴こえないです…！」
ドアに張り付いている優香が言った。
「！…凄いです…！思ってたより…！」
「ん？」
気になって壁に張り付く。すると少しだけだが声が聞こえる。

「あ、くすぐったいぞ…！」
「あうぁ…ぁう」
「ちょ、やめろ。そこはダメだ…あ！」

ブッ――――――
言うまでもない。俺の鼻血だ。
「これは……マジか？」
「…ちっ、こんな事ならカメラ持ってくるんだった」
「…何に使う気だ」
「もちろんコレを撮って…今夜のオカ、ゲフン、ゲフン」
充がごまかした。

「覗いて、良いのかな？どうします？宋二先輩」
「どうも、こうも」
困るしか無い。というか瑠々はこんな事する人じゃ無いはず！うん、大丈夫。大丈夫。たぶんＵＮＯだ！そうだ。そうに違いない！
「覗くか…」
「駄目！お天道様とゆーかが許そうともこの私が許さん！人の恋路を邪魔する奴は！この充が許さん！」
充が空高く飛び上がった。
「わ、凄い」
「アホらしい」
実際は１．５ｍ程跳んでいる。
「行くぞ！流星拳！！」
空中で充が拳を突き出し、突進して来る。
「ここまでくると…」
「アホと言うより天才って言った方が良いんじゃないか？」
輝が言う。
空から一筋の矢と化しこちらへ来る充を宋二はひょいとかわした。
紙一重で。

「うわっ！」
充は勢い余って倉庫のドアにぶつかりドアを開けてしまった。
「痛たたた…」
充が起き上がる。
「……は？どうしたのだ？こんな所に来て」
瑠々が充の真後ろで仁王立ちしている。
「あう」
風亥も真似て、後ろに立っていた。
「いや、決してやましい事を見ようとしていた訳でも無く、いや、ちょっと見れたらいいなとか思ってないよ！別に！」
必死にごまかそうと充が否定しているが、逆に墓穴を掘っていた。
「ん？宋二もか？というか全員か…何事だ？」
「いや…何も…というか瑠々先輩、何してたんですか？」
優香が代表になっていた。瑠々達は顔を青ざめさせた。
「いや、別に何も」
「にゃーー」
「え？」
今のは猫の鳴き声だ。あぁそういうことか。
「瑠々さん……猫、拾ってますね？」
「いやいやいや、べ、べ別に何も拾ってなんか」
「にゃーー」

正に致命傷。今ので完全にばれた。

「あう？」

「…だな仕方ない…」

瑠々が真剣な目でこちらを見まわした。

「すまん！登校中に猫を拾った！」

真正面で謝ってきた。ここまでされるとは予想外だった。いつも通りに「猫を拾ってきた、別にいだろ」ではなく。謝ってきたのだ。（明日、雨が降るな）と失礼な事を考えてしまった。

「別に…いいんじゃないですか？」　優香が瑠々を庇うように言った。

「……」

それを無言で輝が見つめる。

「いや…今日は良いとして、明日以降どうするんだ？このまま学校で飼う訳にはいけないだろ？」

「…尤(もっと)もな正論だな…」

「あうぅ…」

風亥が悲しそうな顔をした。何気なく風亥は猫を気に入っていた。

「誰かの家で飼うとか？」

充が言った。その途端、皆が充を見つめた。「言い出しっぺだろ？」という顔だ。

「へ？…っ無理無理！私のアパートではペット禁止なの！」

その言葉を聞き、瑠々と風亥は落胆した。

「ちなみに。俺も無理だぞ？」

輝が言った。

「何故ですか？」
「……俺の家で犬を４匹飼ってて…」
「マジか？」
充が聞いた。どうやら嘘を言ってるのかと疑っているようだ。
「マジだ」

「じゃ、どーすんの？」
「仕方が無い…もといた場所に…」
「そんな酷な事をしろというのか？いつから宋二は鬼畜になった？」
宋二の発言にたいして瑠々が言った。
「鬼畜じゃない。じゃあ本当にどうする？」

「私達が飼うか？」
瑠々が言った。
「…無理…じゃ、無いな」
「だろ？良いだろ、宋二？」

「んー分かった！俺が飼う」
優香と風亥が喜んだ。
「あれ？何で先輩方が喜ぶんですか？」
「あ、いや、まぁ…宋二の家に遊びに行った時会えるじゃないか」
ふーん、と納得したように優香が頷いた。
「で！猫の名前どうすんの？オススメは…」
「どうせ下ネタなんだろ？」
充を輝が止めた。
「へ？何で分かったの？」
「いや、そこ！否定しろよ！」
輝が充にチョップを食らわした。そして、充は「いたーい」と言っていた。

「そうだな…ベヒモット、とかソロモンとか…」
「いやいや…それ、何の話ですか？猫では無いでしょう？」
宋二が的確にツッコミを入れる。このメンバー…ボケが多くないか？

「じゃあ……」
「あう！」
風亥が手を挙げた。
「あうあうあうあう！」
「成る程…それは良いな」
充が「何故分かる！」と小声で言った。
「名前は「リリアン」で良いか？」
「リリアン？あれ？何かの装飾品じゃないですか？」
「何か語呂がいいじゃないか」
いや語呂で決めて良いのか？…良いのだろうか？
「良いんだよ、語呂も結構重要だぞ？」

「では、この子の名前はリリアンで決定！」
足元の猫がにゃーと鳴いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7305s/

残酷な彼女と服従の彼

2011年10月8日23時32分発行